

平成 28 年 10 月 12 日

フルーレにおける肩の転移について（通知）

（公社）日本フェンシング協会
審判・ルール・ライセンス委員会

会員各位には 2016 年（平成 28 年）5 月に既に文書としても通知しておりますが、2016 年 2 月に FIE の競技規則が改訂され、フルーレにおける肩の転移は第 1 グループの違反の対象となり、イエローカードが付与されます。国内においては、すべての大会で適用されます。これら変更についての解説をお知らせいたしますので、周知の程お願いいたします。

<解説>

フルーレにおいて剣を持っていない腕を、剣を持っている腕の前に出すこと（肩の転移）は、グループ 1 の違反（イエローカード）対象である。

FIE では、「選手が肩を動かしている間に、剣をもっていない腕が有効面を覆い隠しているかどうかははっきりしないケースを、正しく判定することが目的」だとしている。すなわち相手に対して剣を持っている腕の肩より、剣を持っていない腕の肩を前に出す選手の動作を見極めることである。両方の選手が普通のフェンシング・ディスタンス（間合い）である場合は問題ないが、動作の結果として剣を持っていない腕の肩が、剣を持っている腕の肩より相手に近づくような動作が起こるケースがある。選手同士が交差する場合や選手が近い距離で後ろに下がる場合である。このようなケースでは、**ペナルティを与えてはならないもの**としている。

* Passing(交差)

交差の場合、選手は普通トウシュしようとして相手に対して肩を回転させる。しかし、それは選手同士のピスト上での位置が変わっただけで、肩を回転させたことにはならない。

ペナルティを与えてはいけない幾つかの例

- ・ 選手がアタック（ファントやフレッシュ等）を行なった結果、相手と交差した時、交差を起こした選手が振り返らなければならない義務はない。
- ・ 相手に交差された結果として交差を起こした選手が自分の後ろにいる時。
- ・ 交差しようとする相手にリポストをした選手に対して。

これらの時は、ペナルティを付与してはならない。審判は、「止まっている相手に対して剣を持たない腕の肩を前に出す（肩を転移する）選手」と、「動きながら交差しようとしている相手に対応して肩を前に出す選手」とを区別しなければならない。

* Pulling Back at Close Distance(近い距離で後退する)

これは最も見極めなければならないケースである。これは例えば右利き対左利きの選手の試合で、一方の選手が瞬時に相手選手に攻撃を仕掛ける時によく見られる。

例) 選手 X が後退しようとする時に、Y はアタックをするかアタックしようとする素早く間合いを詰めた。X は近い間合いで Y を突くコントロール・アタックを行うために剣を持った腕を大きく引いたため、肩が転移するような動作に見えた。

この場合、選手 X の剣を持つ腕の肩は自分の有効面に対して回転はしていないが、自身の有効面よりも後ろにある。この場合についてはトウシュをしようとする選手が、肩を動かしながら後退しても罰則を与えるべきではない。彼は剣を持っていない腕の肩を前に出しているのではなく、近い間合いの相手に対応するために剣を持っている腕を引いているだけである。

* Intent of the Panalty(罰則の目的)

肩の転移の罰則は「突かれることを避けるために肩を転移する選手へ科する」ことを目的としている。この罰則の適用は、選手が相手を突こうとする時に罰則を起こさせようと意図したり、ディスタンス(間合い)を崩させたりするものではない。